

國學院大學學術情報リポジトリ

垂加神道と国学：その関係をめぐる研究史

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 公太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000555

垂加神道と国学—その関係をめぐる研究史—

齋藤 公太

はじめに

近世前期に山崎闇齋が唱道したとされるいわゆる「垂加神道」は、これまでの研究においてしばしば「国学」と対照的なものとして、いわばその陰画として語られてきた。たとえば垂加神道に関する通説的な理解を明晰に要約した以下のような説明は、その典型的な例であろう。

闇齋は、伝統的な神職の家系とは関係のない、一介の庶人でありながら、既成の神道の教説を総合し、朱子学の理論にもとづいて、新しい教理の体系を組織した。神道と儒道との一致は、これ以前にも、林羅山ら多くの学者によって主張されていたが、このように理論的に体系化されたことはなかった。このことにより垂加神道は、闇齋の晩年から十八世紀前半にかけて、神道界に大きな勢力を占め、特に知識人や神官の間に、その影響が著しかった。やがて国学（復古神道）の発展とともに、その批判の対象とされて衰えたが、思想的には国学の発達を準備する役割を果たしたともみることができる¹。

ここには垂加神道と国学の関係をめぐる二つの重要な論点を示されている。一つは垂加神道が近世中期まで隆盛を見せながらも、文献実証主義的な国学の登場によって舞台を退場したということ、そしてもう一つはそのように衰退していったにも関わらず、垂加神道は国学の登場を準備した側面があるということである。このような論点の背景には、近代における垂加神道と国学の研究史が存在している。本稿はそのような研究史を概観しつつ、今後の垂加神道と国学の関係をめぐる研究の可能性を考察する試みである。

なお、「垂加神道と国学」というテーマに関しては、日本思想史学会の平成11年度大会において同タイトルのパネルセッションが開催されており、その内容に基づく要旨が『日本思想史学』32号（2000年）に掲載されている。同誌に掲載された前田勉、西岡和彦、小林准士による議論は現在でもなお重要な論点を提示しているが、本稿との関連でいえば、遠藤潤による冒頭の「「垂加神道と国学」——先行研究と論点の所在」が意義深い。遠藤は「ナショナリズムの文化的起源」という問題設定から垂加神道と国学の関係をめぐる研究史を概観し、第一に「垂加神道から国学へ継続的・連続的に映じる諸現象をどう捉えていくか」、第二に「垂加神道や国学は近世社会においていかなる〈場〉に流通したか」という論点を提示している。本稿はこのような遠藤らの議論をふまえつつ、より垂加神道の研究史に即する形で改めて研究史を検討する。

1. 戦前の研究史

(1) 垂加神道と国学の関係をめぐる研究前史

垂加神道と国学の関係をめぐる戦前の研究史を概観する前に、その歴史的背景を瞥見しておきたい²。本稿の冒頭で述べた第一の論点に関していえば、たしかに近代以降「国学者」と称されることになった近世の人々の言説には、上述のような垂加神道に対する批判が見出される。たとえば多田義俊は以下のように垂加神道の代表的教説である「土金之伝」を批判する。

今日より新作して理屈詰に説ば、土金にかぎらず。如何様の事も編立らるべし。それにては故実に非ず。太古の道いかん。上代の教いかんと、紀文の慥なるによりてこそ学文ともいはめ。理が面白きと云ては一ツ拵へ、是はめづらしき義とては二つこしらへては、古へを好むには非ず³。(多田義俊「土金伝授之事」『蓴菜草紙』、寛保3〈1743〉年成立)

神儒の「妙契」を説きながらも、実際は「附会」に陥っているとすこした「垂加流」への批判は、「殊に知らず人は神に非ず、孰れか能く神の心を知らん。神の心は唯だ神のみ知ると為す⁴」(明和2〈1765〉年8月4日付谷川士清宛本居宣長書簡、草稿)という本居宣長の垂加神道批判とも共通しており、当時の「国学者」において広く共有された見解であったことが推測される。

このような近世の国学者による「垂加流」への批判は、平田篤胤の『俗神道大意』(万延元年〈1860〉刊)による定式化を経て、近代へと受け継がれた。牟禮仁は「国学」という言葉・概念が、明治15年(1882)以降、明治20年(1887)までの時期に、小中村清矩とその周辺で形成されたと推定している⁵。その小中村は神道の歴史を主題とする講演のなかで、垂加神道に関して、「凡べて神代巻を、教訓の書なりとして、牽強附会し、神道の本旧なるにより、秘伝口訣多しなど唱へたり⁶」などと述べている。このように小中村の段階では近世の垂加神道批判の言説を受け継ぎつつ、それを「国学」による垂加神道の克服という歴史像によって再解釈しつつあったことがわかる。のちにたとえば河野省三が「国学者が、其の内的生命たる神道の信仰からして、かういふ神道の俗悪化を痛嘆し、抜本的刷新を試みて純神道を唱へ、神道の復古運動を興したのは、誠に自然の勢ひである。……山崎闇斎の垂加神道に至つては、不合理、低級の附会的分子が頗る濃厚になつてゐる⁷」と述べているように、このような歴史像は近代を通じて受け継がれていき、通説化していったのであろう。

他方で明治末期から大正期にかけて形成されていった神道学は、垂加神道に関して異なる視点も提示した。たとえば田中義能は明治43年(1910)の著作のなかで、「垂加神道」について「附会も少なくないのでありますけれども、神道発展の一ツの徑路を成して居るから斯う云ふ神道も是非ひと通りは知つて置かなくてはなりません⁸」と述べている。このように垂加神道を単純に批判するのではなく、神道の歴史的発展という枠組みのもとでその意義を探究する視点ももたらされたのである。以後、垂加神道から国学へ継承されたものは何かということが新たな論点となり、研究が行われていく。それは冒頭に引用した尾藤正英の説明における、「思想的には国学の発達を準備する役割を果たしたともみることができるといふ第二の論点へとつながるものであろう。

以上のように近代以降の垂加神道と国学の関係をめぐる研究は、両義的な二つの観点を内

包していた。

(2) 村岡典嗣

上述のような垂加神道研究の流れを汲みつつ、国学の形成に対して果たした垂加神道の積極的役割を論じた最初期の人物は、村岡典嗣であると思われる。そのような村岡の観点が明確に表明されたのは、大正14年（1925）に発表した論考「垂加神道の根本義と本居への関係」においてであった。そのなかで村岡は、古典における「造化」と「人事」の一致を説く「天人唯一」の解釈学が垂加神道の「根本義」であるという斬新な理解を提示した。村岡は、従来牽強附会と批判されてきた垂加神道の古典解釈に関して、古典に表われた不合理な記述をそのまま受け止めるという「宗教的情操」としての意義を新たに見出したのだった。そして本居宣長は垂加神道を批判しながらも、「天人唯一」に見られるこのような「宗教的情操」を継承したとする。それがたとえば宣長における古典の寓言的解釈の否定に表われていると村岡は述べる⁹。無論、前述のように宣長は垂加神道を明確に批判していたのだが、そのことと「宗教的情操」の継承との関係について、村岡は次のように結論づけている。

さてこの両種の関係〔否定と継承〕について、いずれが正しいかを問ふは無意義である。けだしともにそれぞれ別なる見地に於いて成立する、別種の価値関係である。歴史はその各々を要求し、又両者を許容する¹⁰

村岡は他面で垂加神道の「天人唯一」の思想が天皇に対する「絶対崇敬の信仰」としても表われているととらえており、尊王思想としての垂加神道に対する評価とのつながりも保持しているが、重点はあくまで垂加神道の「宗教的情操」に置かれている。このような観点には、村岡自身の学問的・思想的背景が深く関係しているだろう。村岡は宗教哲学者・波多野精一に師事した日本思想史学者であり、明治39年（1906）から40年（1907）にかけて、エルンスト・トレルチと宗教史学派の影響を受けた普及福音新教伝道会の運営する独逸新教神学校に在籍していた。そこから村岡は比較宗教史的視点から宗教性の進化を見出すという枠組みを摂取したと考えられる¹¹。このような背景のもとで、村岡は近代的知識人の知的関心に応えうような垂加神道理解を提示したのだった。

他方、歴史学者の平泉澄も大正15年・昭和元年（1926）頃から閩齋学派への関心を深め、昭和7年（1932）の「山崎閩齋先生二百五十年祭」などを通して、垂加神道を含む閩齋学派の思想の再評価を進めていった¹²。平泉もまた村岡と同様、クローチェやマイネッケ、トレルチの思想に親しむ知的背景を有していたが、平泉は村岡と異なり、閩齋学派の尊王思想に見られる「日本精神」の歴史的・一貫性を、日本人の実存の根拠として重視した¹³。田尻祐一郎は平泉の閩齋学派・垂加神道研究に、村岡批判の意味が込められていた可能性も指摘している¹⁴。

平泉以後、昭和戦前期に閩齋学派・垂加神道の研究は隆盛していくが、村岡の提示した垂加神道理解と平泉のいわゆる「皇国護持史観¹⁵」をいかに調停するかという課題が、まさしく垂加神道と国学の関係という歴史の一貫性の場面において立ち現われることになる。

(3) 小林健三

昭和期に入り、体系的な垂加神道の研究を確立したのが東京帝国大学国史学科で平泉澄に師事し、同大の神道講座の講師などを務めた小林健三であった。小林もまた垂加神道と国学の関係について論じている。小林によれば復古神道は徂徠学から方法論を継承しつつ、「学の目標」「本質的価値」においてそれと相違していた。他方で復古神道はその成立において垂加神道から影響を受けていたという¹⁶。その証拠として小林は、第一に荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤が、いずれも修業時代に「垂加派の師」に師事していたこと、第二に国学者も「大義名分の思想」や「ヒモロギの思想」に見られる「国家的精神」を受容していたこと、第三に平田篤胤の「俗神道」批判自体が垂加派出身の吉見幸和の影響を被っていたことを挙げている。

こうした小林の観点は、自ら明示しているように村岡の研究を参照しているが、同時にそれを「国家的精神」の継承という平泉の歴史観の枠組みに引き寄せている。その点で小林は村岡と平泉の観点の接合を図っているともいえよう。

(4) 安川實

小林と同様、村岡と平泉の観点の接合を試みたのが、両者に師事したと推測される安川實である¹⁷。安川は日本の本来性を主題とする神道思想を「日本神学」と呼び、その歴史的発展過程の研究を行った。そのなかで安川は、「垂加神道の本質は、天皇に対する絶対随順の精神」であり、「古学神道」の「先駆」としての側面を有していたと述べているが、同時に非学問的な「宗教的信仰」に滞留していたと位置づける。しかし徂徠学派の「日本神道否定論」以降、「日本神学」の「革新運動」が起こった。そこで垂加派出身であった吉見幸和は文献考証主義による垂加神道の「自己革新」を遂行し、「歴史的な神学」を提唱したという。かくして垂加神道、徂徠の古文辞学、幸和の「歴史的な神学」が「古学神道成立の思想的背景」になったと安川は考察する¹⁸。

安川のいう「日本神学」の一貫性の強調には平泉の影響が見られるが、その神学的・宗教的発展をめぐる考察は村岡の議論に近い。そこで鍵となるのが吉見幸和の存在である。安川は、平泉が評価したトレルチに見られるような、歴史主義をふまえた神学と類比的なものを幸和の「歴史的な神学」に見出し、日本の近世にヨーロッパと共通する歴史主義の成立過程を跡付けようとする¹⁹。それにより、宗教進化論に基づく村岡の直線的な神道史理解を引き継ぎつつも、それを乗り越える視点を提示しようとするのである。

2. 戦後の研究史

(1) 三木正太郎

村岡と平泉の二つの枠組みをふまえながら垂加神道と国学の関係をいかにとらえるかという課題は、戦後の研究にも引き継がれていった。たとえば平泉澄に師事した三木正太郎は、村岡典嗣の研究も参照しつつ、垂加神道から国学への「精神」の継承を強調した。三木によれば、たしかに国学は垂加神道の附会説を否定したが、「天地と人との間に唯一の理が貫くこと」、「万物それぞれの本性を發揮することが、天地自然の道」であることを主張する「天人唯一の伝」の本質、そして皇統守護という「神籬磐境の伝」の精神は、国学も継承したと述べている²⁰。そして平田篤胤はキリスト教の影響を受けつつ垂加神道の「日之少宮之伝」

における「靈魂不滅の信仰」を継承したとしている²¹。

このような三木の議論は従来の研究の流れを汲むものだが、垂加神道から国学へと継受された「精神」の内容が死後世界観などにまで拡張されている点に特徴が見られる。

(2) 阿部秋生

以上の研究史に対し、国文学者の阿部秋生は社会的背景の変化を基準とすることで、垂加神道から国学への「精神」の継承という平泉・村岡の枠組みに共通する観点を否定した。阿部によれば、闇斎の神道教説の背景にあるのは「戦国以来の荒武者の風儀を、幕藩体制下の武士道に切りかえようとする強引な政策が揺れている時期」という状況であった。他方、吉見幸和の背景にあるのは延宝～元禄期の社会制度の変化を背景とした、「人間の知性や情感を信じて方法を樹てるべき」という思潮であった。学統にのみ着目すれば幸和は垂加神道に属することになるが、社会的背景の水準ではむしろ幸和と契沖ら国学の潮流は共通していると阿部はいう。すなわち垂加神道の思想が発展して国学へとつながっていったのではなく、時代ごとの社会的背景に応じて学問の方法が変化していったということである。

阿部は、「儒家神道と国学は所詮相容れぬもの」、「儒家神道を批判することによって国学の方法が確立したというような、マイナスの脈絡さえもなかった」と述べ、社会的背景を捨象した思想の継承関係を徹底的に批判する²²。このような視点は、頂点思想家の主観の追体験だけではなく、むしろ思想が置かれた社会的文脈に留意する近年の研究動向を先取りするものでもあろう。

3. これからの研究に向けて

これまで見てきたような戦前から戦後にかけての研究史をふまえた上で、垂加神道と国学の関係をめぐる研究に今後どのような可能性があるのかを考えていきたい。

(1) 「天皇崇敬」の再考

前田勉は1990年代の国民国家論の隆盛をふまえた上で、垂加神道から国学への天皇崇敬の継承の歴史的意義を再検討した。前田は垂加神道の「神籙伝」に見られる救済論に着目する²³。それはすなわち天皇を守護することで、死後に「此国ノ神」となることができると説くものだったと前田はとらえる。前田によればそれは「その受容層であった公家・神官が、幻想の世界の中で、地位の逆転を求めるものであった」という²⁴。かくして垂加神道により浮上した天皇の権威が、国学へと受け継がれていく。とりわけ宣長は商品経済の進展などにより社会秩序が動揺した18世紀後半の社会のなかで、万民の生が天皇につながりうるという救済論へと再解釈した。このように前田は社会状況に対応した救済論の展開という観点から、垂加神道から国学へと受け継がれた「天皇崇敬」をとらえ直そうとする。

こうした前田の観点は垂加神道から国学への尊王思想の継承という戦前以来の枠組みを、社会的文脈の観点から再考したものといえる。たとえば江戸の垂加派の中心が旗本の跡部良顕であったことに鑑みれば、前田の措定する社会的文脈に関してはなお検討の必要があると考えられるが、前田の視点は今後も垂加神道と国学の関係を考察する上で重要な意味を持つものであろう。

(2) 文献考証主義の進展と人的ネットワーク

対立関係にあったと目されがちな垂加神道と国学であるが、実際にはいわゆる「垂加神道家」と「国学者」との間に学問上の人的ネットワークが存在していたことは、戦前から注目されていた。それはたとえば稲荷社における大山為起と荷田春満の関係、本居宣長と村田元次・全次、谷川士清との関係、平田篤胤と中山菁莪との関係などである。その点をふまえ、近年では垂加派内部における文献考証主義の発展と国学者との人的ネットワークに関する実証的研究が進展している。たとえば松本丘は、垂加派は「国学派に先んずる形で、古語を通じた実証的研究への道を拓きつつ」あったと述べている²⁵。

具体例を挙げると、宣長が所蔵していた寛永版本『古事記』（本居宣長記念館所蔵）の旧蔵者が、垂加派の大山為起であったことは千葉真也が一連の研究のなかで明らかにしてきた。千葉によると、宣長は『古事記』の本文校訂において為起の説を時に採用しているという²⁶。

為起に関しては、同時期に山城国稲荷社に勤めていた荷田春満との間に何らかの交流があった可能性も戦前から注目されていた。しかし松本久史は「直接の師承関係はなかったとみるのが妥当²⁷」と結論づけている。ただし為起独自の校訂と大西親盛本『古事記』に記された荷田春満の注釈が一致する箇所も存在しており、為起の研究を春満が参照していたか、両者が共通（系統）の写本を参照していた可能性を拙稿では指摘した²⁸。

なお、拙稿や拙著では為起以外の垂加神道家による古事記研究も取り上げている。たとえば渋川春海と谷秦山の往復書簡である『古事記問批』（元禄10〈1697〉年成立、高知城歴史博物館山内文庫所蔵）には、古語と古事への関心や文献実証主義的態度が見られる²⁹。また岡田正利の『古事記事跡抄』（元文4〈1739〉年成立）の歌謡解釈では契沖の説が参照されていることがわかる。

契沖との関連でいえば、闇斎学派のなかで神儒兼学の立場を主張した若林強斎は契沖を「万葉ノ朱子³⁰」と呼んで尊崇し、その説を受容していたことが言行録に残されている³¹。強斎と同門の山本復斎も和訓の問題に着目し、契沖門下・野田忠肅と交流していたことを股座真美子が明らかにした³²。以上のように垂加派においても着実に文献考証主義的な古典研究が発達しており、それにともない契沖のような国学の学説の受容も進んでいたのである。

このことは従来の「垂加神道」と「国学」という区分そのものを再考する必要性を提起するものであろう。しかしそれは単に垂加神道から国学へと文献考証主義が直線的に進歩していったということではなく、同時に文献の実証や考証とは何であるかを問い直す必要性をも提起しているだろう。なぜなら「国学」による実証や考証自体、近代的な意味でのそれとは異質な面を含んでいるからである³³。そしてまた、「垂加神道」と「国学」という区分の再検討は、小林准士が提起しているような言説の流通する社会的な場に着眼して垂加神道と国学の関係を再考することともつながるだろう³⁴。

(3) 儀礼の側面における受容

玉木正英によって橘家神道が垂加神道へ接合されたことは、垂加神道の儀礼面を強化することになった。同時にそれは垂加神道の普及を介して橘家神道の儀礼が国学にもたらされることもともなっていた。西岡和彦が明らかにしたように、出雲大社では各国造家の祈祷のため、垂加神道・橘家神道を受容しており、宣長門人の千家俊信が国学を導入した後も、「神道」（垂加神道・橘家神道）と「古学」（国学）は併存していた。そして近代に至るまで国学に欠

落していた祭式を補うものとして橘家神道の儀礼が継承されることになる³⁵。

福井款彦もまた矢野玄道が橘家神道の伝授を受けていたことを解明している。その伝授は常磐井巖戈からであったと推測されている。矢野が気吹舎に入門した後も橘家神道は併存しており、矢野の臨終の際の儀式も橘家神道であったことが推察されるという³⁶。以上のような儀礼の面における垂加神道（橘家神道）と国学の関係もまた、今後なお探究すべき可能性のある領域といえるだろう。

（4）「垂加神道」と「国学」という概念の歴史性

前述の「垂加神道」と「国学」という区分の再検討にも関わることだが、この二つの概念の歴史性にも着目していく必要があるだろう。そもそも宣長ら近世の「国学者」は「国学」という呼称を使っておらず、前引のように牟禮仁は「国学」という言葉・概念が、明治15年（1882）以降、明治20年（1887）にかけての時期に形成されたと推定する。垂加神道に関しても同様に、闇斎は自らの神道教説を「垂加神道」と呼んでいたわけではない。近世の国学者たちも闇斎らの神道教説を批判する際にはそれをしばしば「垂加流」と呼んでいた。「垂加神道」という呼称が普及するのは明治30年代以降であったと推測される³⁷。

要するに「国学」と「垂加神道」という言葉が定着するのは、いずれも明治期になってからのことであった。これは単に呼称の変化に留まらず、それにともなう概念の変化の問題も含んでいる。すなわち「国学」と「垂加神道」の関係という問題設定自体が、近代的なものではないかということである。

おわりに——今後の課題

以上述べてきたことをまとめるならば、次のようにいえよう。近世の「垂加流」批判をふまえ、国学による垂加神道の克服という国学史像が明治期に確立する。大正から昭和前期にかけて、垂加神道の歴史的意義に関する再評価が進み、とりわけ村岡典嗣が「宗教的情操」の発展という観点から垂加神道と国学の関係を新たに意味づけた。平泉澄に領導され闇斎学派の研究が隆盛するなかで、村岡と平泉の視点をいかに接合しつつ垂加神道と国学の関係をとらえるかが以後の課題となるが、そこで共通していたのは精神や内面性の継承・発展という枠組みであった。

以上のような研究史を経て、現代では精神や内面性を必ずしも中心にすえない関係性のとらえ方が模索されている。すなわち社会的文脈に基づく天皇崇敬の再検討や、文献考証主義の進展、人的ネットワークと言説の「場」、儀礼の継承などに着目する研究動向である。それは20世紀以降の実証的国学研究の動向とも交錯するものであろう。

そしてまた「垂加神道」と「国学」という概念自体が近代以降に形成されたものであることも、今後留意していく必要があるだろう。しかしそれは単にそれら二つの概念が近代の構築物にすぎないということではない。宣長ら「古学」や「皇国学」の立場からの「垂加流」批判という言説は歴史上確かに存在していた。近代国民国家が確立されていく歴史のなかで、そのような過去の言説を受け継ぎとらえなおしていく営みとともに、「垂加神道」と「国学」という概念やその関係性という問題設定も形成されていった。そうした近代の営みを受け継ぎながら、「垂加神道」と「国学」という言葉で名指されていたものを今改めていかにとらえていくのか。そのこともまたこれからの研究における課題であろう。

【付記】

本稿は2019年2月27日に國學院大學で行われた第3回国学研究プラットフォーム公開レクチャーでの報告に基づくものである。公開レクチャーについては本誌「2018年度のトピック3」を参照。

注

- 1 尾藤正英「垂加神道」（『国史大辞典』第8巻、吉川弘文館、1987年）5頁。
- 2 以下に述べるような「垂加神道」概念をめぐる歴史は、拙稿「「唯一神道」から「垂加神道」へ—概念の歴史をめぐる試論—」（『藝林』68巻2号、2019年10月）のなかでより詳細に論じている。本稿はその成果をふまえ、大正期以降の研究史について考察を行う。
- 3 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成〈第2期〉14』（吉川弘文館、1974年）、18-19頁。
- 4 『本居宣長全集』第17巻（筑摩書房、1987年）39-40頁、原文文。
- 5 牟禮仁「皇学四大人から国学四大人へ」（『皇學館大学神道研究所紀要』第19輯、2003年3月）121-122頁。
- 6 「神道」（『陽春盧雜考』巻之六、吉川半七、1898年）11頁。
- 7 河野省三『国学の研究』（大岡山書店、1934年）63-64頁。
- 8 田中義能『神道本義』（日本学術研究会、1910年）80頁。
- 9 村岡典嗣「垂加神道の根本義と本居への関係」（『増訂日本思想史研究』所収、岩波書店、1940年）。初出は1925年。同『神道史』（創文社、1956年）。
- 10 同上、255頁。
- 11 拙稿「村岡典嗣の神道史研究とキリスト教—近代国体論と宗教理解—」（吉馴明子・伊藤彌彦・石井摩耶子編著『現人神から大衆天皇制へ—昭和の国体とキリスト教—』所収、刀水書房、2017年）。
- 12 若井敏明『平泉澄—み国のために我つくさなむ—』（ミネルヴァ書房、2006年）91頁。
- 13 平泉澄『万物流転』（至文堂、1936年）。
- 14 田尻裕一郎「村岡典嗣と平泉澄—垂加神道の理解をめぐる—」（『東海大学紀要 文学部』74号、2000年）106頁。
- 15 田中卓「皇国護持史観と皇国讚美史観」（『田中卓著作集』11-II所収、国書刊行会、1998年）。
- 16 小林健三「垂加神道の復古神道に与へた影響」（『垂加神道』所収、理想社、1942年）。初出は1936年。
- 17 平泉との関係については伊勢宗治「解説」（安川実『本朝通鑑の研究』所収、言叢社、1980年）295頁を参照。また安川はその論文「古学神道成立の由来」（『神道学』復刊31号、1961年11月）の末尾に、「本稿を草するにあたって故村岡典嗣先生の御教示を受けるところが多かつたことを附記する」と記している（51頁）。
- 18 安川實「吉見幸和に於ける歴史的神学の展開」（『国民精神文化』5巻12号、1939年12月）、同「古学神道成立の由来」（『神道学』復刊31号、1961年11月）など。
- 19 安川前掲「吉見幸和に於ける歴史的神学の展開」、1252頁。
- 20 三木正太郎「垂加神道と復古神道—天人唯一の伝と惟神・神習—」（『日本思想史の諸問題』所収、皇學館大學出版部、1989年、初出1969年）、「垂加神道と復古神道（その二）—神籬磐境の伝と「直毘靈」の精神—」（『平田篤胤の研究』所収、臨川書店、1969年、初出1966年）。
- 21 三木正太郎「垂加神道と復古神道（その一）—日之少宮の伝と幽冥観—」（前掲『平田篤胤の研究』所収、1957年）。
- 22 阿部秋生「儒家神道と国学」（『日本思想大系39 近世神道論 前期国学』所収、岩波書店、1972年）。
- 23 前田勉「呪術師玉木正英と現人神」（『近世神道と国学』所収、ペリかん社、2002年、初出は1995年）、同「近世日本における天皇権威浮上の理由」（『日本思想史学』32号、2000年）、同「近世天皇権威の浮上」（『兵学と朱子学・蘭学・国学—近世日本思想史の構図—』所収、平凡社、2006年）。

- 24 前田前掲「近世天皇權威の浮上」、214頁。
- 25 松本丘『垂加神道の人々と日本書紀』（弘文堂、2008年）158頁。
- 26 千葉真也「本居宣長手沢本旧事紀または大山為起校訂本旧事紀について」（『朱』36号、1993年2月）、同「古事記校訂における為起と宣長——宣長手沢本古事記上巻」（『相愛大学研究論集』9号、1993年3月）、「為起から宣長へ」（『中西智海先生還暦記念論文集 仏教と人間』所収、永田文昌堂、1994年）。
- 27 松本久史『荷田春満の国学と神道史』（弘文堂、2005年）47頁。
- 28 拙稿「大山為起と荷田春満の『古事記』注釈」（『國學院大学研究開発推進機構紀要』8号、2016年3月）。
- 29 拙稿「垂加神道における『古事記』研究—神典解釈の問題を中心に—」（『國學院大學研究開発推進機構紀要』第7号、2015年3月）。拙著『「神国」の正統論—『神皇正統記』受容の近世・近代』（ペリカン社、2019年）に再録。
- 30 『望楠所聞』（金本正孝編『強齋先生語録』所収、溪水社、2001年）96頁。
- 31 前掲拙稿「垂加神道における『古事記』研究」を参照。
- 32 股座真美子「十七世紀後半～十八世紀前半における〈知〉の断面—魚崎村の闇齋学派・山本復齋を通して—」（『書物・出版と社会変容』16号、2014年）。
- 33 山下久夫先生のご教示による。
- 34 小林准士「垂加派知識人による正統性の生産」（『史林』80巻3号、1997年5月）、同「知の普及と地域社会」（『日本思想史学』32号、2000年）。
- 35 西岡和彦『近世出雲大社の基礎的研究』（原書房、2004年）、同「出雲大社に於ける垂加神道と国学の共生」（『日本思想史学』32号、2000年）。
- 36 福井款彦「矢野玄道と橘家神道との関係—玄道の臨終をめぐって—」（『神道史研究』31巻4号、1983年10月）。
- 37 前掲拙稿「「唯一神道」から「垂加神道」へ」を参照。